インド洋津波

被災地「悲惨の一言」

AMDA派遣の調整員が報告

インドネシア・スマトラ島沖の地震と津波被災者の救援活動をしている緊急医療支援のNGO「AMDA(アムダ)」の諏原日出夫・調整員(58)が、十一日帰国。岡山市楢津の本部で開いた記者会見で、現地の惨状を報告した。また、菅波茂理事長(58)が「被災者への巡回医療活動と衛生教育、子どもたちの心のケアに努める」と活動を継続させる方針を示した。

昨年十二月二十八日にインドネシア・アチェ州などに入った諏原調整員は路上に多くの遺体が放置された光景を目の当たりして「悲惨の一言」と暗い表情で語った。「大半の病院は壊れ、同行した医者八人は一日に計四十件近い手術を行った」といい、現地には紛争地帯もあり、水や食料の運搬・配給が満足に行われていないという。

七日から九日までインドの大学などを訪れた菅波理事長も会見で、AMDAは一月末まで一か月間だった医療支援を二月末まで延長し、アジア二十か国の医師らでつくる「民間合同災害救援隊」を三月までに結成するを意向を示した。

菅波理事長は「地域ごとに文化や歴史の温度差があるが、被災者が見捨てられていないと感じる支援を続けたい」と話した。

被災地の現状や医療支援の継続などを話す菅波理事長や諏原調整員ら(岡山市楢津のAMDA本部で)

インドで医療支援にあたるAMDAの現地医師ら(AMDA提供)